公開パネル・セッション

変容する境域とモビリティ
――中央アジア乾燥地の人・モノ・社会――

＜主旨説明＞

地田　徹朗

境界研究とは、グローバル化する世界の中で、既存の行政境界／国境（および境域）の役割や意味合い、越境する人やモノの動態の変化を社会的なプロセスとして捉え直す方向性をもつ学問分野である。冷戦の終焉により、旧ソ連と中国との国境は開かれ、各国の独立を経て境界の透過性は増していった。他方、ソ連の解体の結果として新たに独立した中央アジア諸国の間に生じた国境は、それまでのシームレスな人とモノの移動を制限するものとなる。境界とは、本来的にその時々の政治・経済・社会状況に応じて変容するものであるが、翻って境界のあり方が境域の社会を変質させ、境界を跨ぐ人やモノの動きを変えることもある。本パネルは、境界研究のディシプリンに立脚し、このような動態的な境界のあり方に着目しつつ、中央アジア（主にカザフスタンと中国、カザフスタンとウズベキスタン）の境域における人間活動や人とモノの動きの変化の様態について考察することを目的とする。

本パネルは4つの研究報告から構成される。地田徹朗（北海道大学、歴史学）は、境域としてのカザフスタン領小アラル海地域について、「二十世紀最悪の環境破壊」と称されるアラル海災害からの復興プロセスと、グローバル経済への統合から生じる新たな諸問題について漁業を軸として検討した。渡邊三津子（奈良女子大学、自然地理学）は、カザフスタン南部のアルマトゥ州および南カザフスタン州を対象として、青果物輸入の増加にともなう農業の変容とその地域的差異について報告した。中村知子（茨城キリスト教大学、文化人類学）は、中国新疆ウイグル自治区イリ盆地の中国―カザフスタン国境域における新疆生産建設兵団の活動を取り上げ、境界の変容がモノの生産に影響を与え、それに伴い国境域の人々の生業構造、社会構造に影響を及ぼす実態を報告した。古澤文（千葉大学、人文地理学）は、新疆ウイグル自治区における輸出を視野に入れた青果物の施設栽培と、主要な輸出相手国であるカザフスタンにおける中国産野菜の販売状況と課題について報告した。

各報告のより詳しい内容については各報告要旨に委ねるが、強調しておきたいことは、本

パネルの研究が、冷戦終焉後の境界をめぐる国内政策や国際関係の変容を人・モノの動きというミクロな実態から裏づけ得るポテンシャルをも持っているということである。また、境界・境域・越境をめぐる諸問題は多面的で、その検討には学際的アプローチが必要ある。本パネルは各報告者がディシプリンの壁を越えてこれまで議論をしてきたことの一つの成果である。なお、本パネルに先立ち、関連企画として 2015 年 2 月 7 日に地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「ユーラシアにおける境界と環境・社会 — 学際的対話による包括的な「境界」知の獲得」が行われ、本パネルはこのワークショップのフォローアップ企画でもあることを付記しておく。

（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）